

教科教育学コンソーシアム第4回シンポジウム
教科教育学研究のメソロジー：
私たちは何のために何をどのように研究しているか

2024.3.10 於：一橋講堂

科研成果中間報告

教科教育学研究のメソロジー

－教科教育学研究の方法と課題－

山元 隆春（広島大学）

全国大学国語教育学会

Japanese Teaching Society of Japan

3. 教科教育学の研究方法

- ① **哲学的・原理的方法**（教科の存立の基盤、教科を教える必然性、教科編成、カリキュラムなどについて哲学的・原理的に研究する）
- ② **歴史的方法**（教科教育に関わる過去の教育原理や実践事例などを整理し、分析・評価する）
- ③ **比較教育的（または国際比較的）方法**（主に、諸外国における資料に基づく比較をおこない、類似性・異質性あるいは特徴を明確にする）
- ④ **実験的・実証的方法**（授業実践や調査に基づいて、開発した指導法の効果検証や、学習者が形成している概念の把握などをおこなう）
- ⑤ **実践的方法**（実際の授業の構成や展開などについて記述的に整理し、教材の特色や学習者の反応などについて考察する）

【①～⑤の項目は松村（1986）、（ ）内は松浦（2015,p.105）】

本報告にかかる教科教育コンソーシアム研究会の実施状況

研究会	報告内容	報告者
第7回 2023.8.6	ターミノロジー研究の開始（研究の問いと方法） 全国社会科教育学会・日本理科教育学会の場合	草原和博（広島大学） 中村大輝（宮崎大学）
第8回 2023.9.10	先行研究の検討：日本科学教育学会における調査研究から	中村大輝（宮崎大学）
	社会科教育学におけるメソドロジーの特徴 －全国社会科教育学会の場合－	石川照子（三重大学） 川口広美（広島大学）
第9回 2023.11.5	数学教育学におけるメソドロジーの動向分析	岩田耕司（福岡教育大学）
	体育科教育学研究（2013-2023）にみる研究方法論	岡出美則（日本体育大学）
第10回 2023.12.24	国語科教育学の研究手法論－私たちは、何のために、何を、どのように研究してきたか、研究しているか、研究しようとしているか	山元隆春（広島大学） 勝田 光（筑波大学）
	日本家庭科教育学会誌にみる家庭科教育研究のメソドロジー	貴志倫子（福岡教育大学） 荒井紀子（元福井大学）
第11回 2024.1.24	日本地理教育学会『新地理』掲載論文にみる手法論の傾向と特質	阪上弘彬（千葉大学） 鈴木 允（横浜国立大学）
	道徳（科）教育研究におけるメソドロジーとは？	走井洋一（東京家政大学）
第12回 2024.2.18	中間報告まとめの検討	—

3-1 加盟学協会等のメソドロジーの経年傾向

(1) 日本科学教育学会『科学教育研究』1977-2020

◆2000年代以降に質的研究が増える一方で、目標・目的を論じる理論的・哲学的研究が減少傾向にある。

(2) 全国社会科教育学会『社会科研究』に見る研究方法論の特徴

◆元々多くを占めていた「規範的・原理的研究」が減り、「開発的・実践的研究」と共に「実証的・経験的研究」が増えている。その中でも、主に人を対象としたempiricalな調査研究が増えている。

2. 「開発的・実践的研究」においても、実践検証の要素が強くなっており、より準実験的性格を持つようになっている（従って、実証的・経験的研究との重複も増えている）

3. ただし「実証的・経験的研究」の中でも特に質的研究が多い。

(3) 『日本家庭科教育学会誌』にみる家庭科教育研究のメソドロジー

◆研究方法の主な動向として、80年代中ごろから90年代には主に「質問紙調査」「文献調査」に二分されていたが、2000年代以降、「質問紙法」に加え、「授業研究」および「質的研究方法」の割合が増加している。

◆家庭科教育の場合、授業研究にかかる論文は、「実践・開発」と「実証・経験」的方法の両方を用いて多角的に分析している。

(4) 日本地理学会『新地理』掲載論文（2013-2022）にみる方法論の傾向と特質

◆①規範的・原理的研究、②開発的・実践的研究、③実証的・経験的研究に分類したところ、③の研究や質的な研究が多く見られた

◆認知調査研究が多く、授業実践報告は少ない

◆地理学研究を中心としながらも地理的教材としての意義を主張するような論文が多い。

3-1-1 『体育科教育学研究』（2013-2023）にみる研究方法論

- ◆五つの内容（カリキュラム、学習指導、体育科教師教育、科学論）
- ◆三つの方法（量的、質的、混合）
- ◆メソドロジーの特徴的な傾向は見られない。
- ◆研究対象の授業には、校種や学習成果の検証方法等についてばらつきが見られる。

◆体育科教師教育研究に関して：江藤・嘉数（2019）より

- ・「今後の体育科教師教育研究においては、何を明らかにしたいのかといった研究の問いを明確にし、パラダイムに対応した研究方法が適用されることを研究者が確認する必要があることが示唆された。」
- ・「我が国の体育科教師教育研究は、研修やプログラムでどのような力量が形成されたかを明らかにする傾向があることが考えられる。今後、さらに踏み込んだ視点（深見，2015；木原，2015；北澤・鈴木，2013）である個人主義的方向性を示す研究が求められると思われる。」
- ・「国内文献において体育科教育学に関わる著名な国内4誌に関しては、批判的探究的方向性を示す研究が見られなかったことは、教師の力量形成や発達として焦点が当てられなかったことを示すと思われる。人々の多様性や人権尊重について、近年、日本の学校でこのような問題に関心が高まり、体育科教育においても今後軽視できない方向性となるであろう。加えて、我が国の体育科教師教育では、批判的探究方向性への議論が欠如していることが課題に挙げられる。」

体育教師教育研究の分類方法(江藤,2019,p.6)

表1 理論的方向性を構成する視点 (Tinning (2006, p. 376) より引用)

方向性	研究の見解	教師教育の目的	知識の要素	研究パラダイム
行動主義的 (Behaviouristic)	<ul style="list-style-type: none"> 客観的事実 よりよいものを実証する科学 	教授のスキルを備えた専門家の養成	<ul style="list-style-type: none"> 技術的 予測 コントロール 	<ul style="list-style-type: none"> 実証的分析 自然科学
個人主義的 (Personalistic)	<ul style="list-style-type: none"> 複数の事実 主観性の意義 	人としての個々の教師の能力の開発	<ul style="list-style-type: none"> 実用的 解釈的理解 	<ul style="list-style-type: none"> 解釈学的^{注3)} 解釈的 現象学的^{注4)}
伝統的・技巧的 (Traditional/craft)	<ul style="list-style-type: none"> 理論中ではなく「現場」に存在する 実践が最善である 	システムにおける教員の養成	<ul style="list-style-type: none"> 実践的 技術的習熟度 	<ul style="list-style-type: none"> 単純な記述的モデル化^{注5)}
批判的探究 (Critical Inquiry)	<ul style="list-style-type: none"> 社会的に構築されている社会的不平等, 権力と抑圧 	学校教育または教師の在り方を問う	<ul style="list-style-type: none"> 批評解放 解放 批判的理論 	<ul style="list-style-type: none"> アクションリサーチ ケーススタディ フェミニスト ポスト構造主義^{注6)}

体育教師教育研究の分析結果(江藤,2019,p.11)

表 5 本研究で明らかとなった Tinning (2006) の理論的方向性の特徴 (筆者による加筆)

方向性	研究の見解	教師教育の目的	知識の要素	研究パラダイム	主な研究の問い	研究方法の典型
行動主義的 (Behaviouristic)	<ul style="list-style-type: none"> 客観的事実 よりよいものを実証する科学 	教授のスキルを備えた専門家の養成	<ul style="list-style-type: none"> 技術的 予測 コントロール 	<ul style="list-style-type: none"> 実証的的分析 自然科学 	効果的な教授技術はどのような技術か	<ul style="list-style-type: none"> 量的研究 一定の基準に対する判断や量的な変容について分析する
個人主義的 (Personalistic)	<ul style="list-style-type: none"> 複数の事実 主観性の意義 	人としての個々の教師の能力の開発	<ul style="list-style-type: none"> 実用的 解釈的理解 	<ul style="list-style-type: none"> 解釈学的 解釈的 現象学的 	授業において教師は何を、どのように考えているのか	<ul style="list-style-type: none"> 質的研究が多いが、量的研究や混合研究もある 理論的枠組みを適用させ分析する
伝統的・技巧的 (Traditional/craft)	<ul style="list-style-type: none"> 理論の中ではなく「現場」に存在する 実践が最善である 	システムにおける教員の養成	<ul style="list-style-type: none"> 実践的 技術的習熟度 	<ul style="list-style-type: none"> 単純な記述的モデル化 	プログラムの実践や経験において何を学んだか	<ul style="list-style-type: none"> 質的研究が多いが、量的研究や混合研究もある 実践などの省察について帰納的分析を行う
批判的探究 (Critical Inquiry)	<ul style="list-style-type: none"> 社会的に構築されている社会的不平等、権力と抑圧 	学校教育または教師の在り方を問う	<ul style="list-style-type: none"> 批評解放 解放 批判的理論 	<ul style="list-style-type: none"> アクションリサーチ ケーススタディ フェミニスト ポスト構造主義 	教師はどうあるべきか	<ul style="list-style-type: none"> 質的研究

◆Tinning(2006, p.376)にもとづいて「行動主義的」「個人主義的」「伝統的・技巧的」「批判的探究」の四つの教師教育研究の方向性を提示。

◆このうち、「行動主義的」（「客観的事実」にもとづいて「よりよいものを実証する科学」を志向し、「実証的分析」「自然科学」のパラダイムに依拠）、「個人主義的」（「複数の事実」にもとづいて「主観性の意義」を明らかにし、「解釈学的」「現象学的」なパラダイムに依拠）な方向性と、「批判的探究(Critical Inquiry)」（「社会的に構築されている社会的不平等、権力と圧力」を問題化し、「アクションリサーチ、ケーススタディ、フェミニスト、ポスト構造主義」のパラダイムに依拠）の方向性は、箕浦(2015)の三つのアプローチと共通する。体育教師教育に関してはこの三つの他に「伝統的・技巧的」方向性（「理論の中にはなく『現場』に存在する」ことを明らかにし、「単純な記述的モデル化」パラダイムに依拠）のある点は、後述する箕浦(2015)にはない。しかしこれは、体育教師教育だけのことに止まらないだろう。「伝統的・技巧的」方向性はどの教科領域の研究においても存在するはずである。

3-1-2 国語科教育学の研究方法論

◆全国大学国語教育学会編(2002, 2013, 2023)『国語科教育学研究の成果と展望』

・ I = 1980以前～2002 II = 2003～2011 III = 2012～2022 国語科教育学研究のレビュー

① I (2002)のみ「国語科教育学研究方法論の教育」(国内の教育、外国(米国)における教育)を立項している。

② II (2013)から「学習者研究」のレビューが加わる(Iでは、「読むこと」の章に「学習者論的アプローチ」「発達論的アプローチ」のレビューがある)。IIIでは独立した項目に。

③ II以降「国語科教師教育」の項を設ける。Iでも「国語科授業研究の方法論」「国語科教育学研究方法論の教育」の項でレビューがある。

④ III (2022)で「国語科インクルーシブ教育」の項を設ける(学習者の多様性を考える、新たな研究領域)

⑤ Iの「言語事項」がII・IIIでは「日本語基礎事項」になる(「日本語学」「日本語教育」への視野、学習指導要領の領域構造の変化)。

・ IIから「教師教育研究」の章、「学習者研究」の節を設ける

◆藤森(2022)…『国語科教育』と『読書科学』(日本読書学会)における「学習者研究」レビュー

・ 授業研究・学習者研究において量的研究から質的研究への移行(2000年頃から)

・ 観察収集した談話記録や学習者の記述を一次資料として解釈的に分析する形態が主流

・ 2010年以降、多様な学習者を扱う論文が増加している

・ 国語科教育内容の「教科横断的拡張」の試みが見られる。

◆全国大学国語教育学会編(2015)『国語教育研究手法の開発』

「今まで自分がどのような存在論・認識論に立って研究していたかを自問」(箕浦,2015,p.25)せよ。

箕浦康子(2015)p.24より引用

	論理実証主義的アプローチ	解釈的アプローチ	批判的アプローチ
研究の目的	行動や社会を律している普遍的な法則の定率。知見の一般化	特定状況における行動の規則性を理解し共有する。知見の比較	結果を分析し、不平等をあげ、解放のスタンスを育む
研究の焦点	観察可能な行動に着目。客観的に「測る」ことに力点	行動や状況に埋め込まれた意味に着目。「分かる」ことに力点	不平等な社会構造や抑圧のパターンを「変えていく」ことに力点
研究のプロセス	条件統制をしてノイズを除去し、因果関係を把握することが中心。変数操作が主な研究技法	人と人、人と状況やモノとの相互作用やそこで伝達される意味を分析し、理解することが中心。	隠された権力による統制を明らかにする
研究者のスタンス	客観的であること。研究対象者との間に距離をとる	調査参加者の居る場シヨン参与。主観的であることを厭わない	研究者は、対象から学ぼうとする学習者、かつ批判的意識の覚醒を促す教師
対象者の位置づけ	研究者の指示に従う受動的な存在	研究対象者は能動的な協力者	一緒に学ぶ学習者。研究者にとっての教師
主なデータ収集法	数量的データを得るための実験や調査	質的データを得るためのフィールドワーク	量的、質的どちらのデータでもかまわない

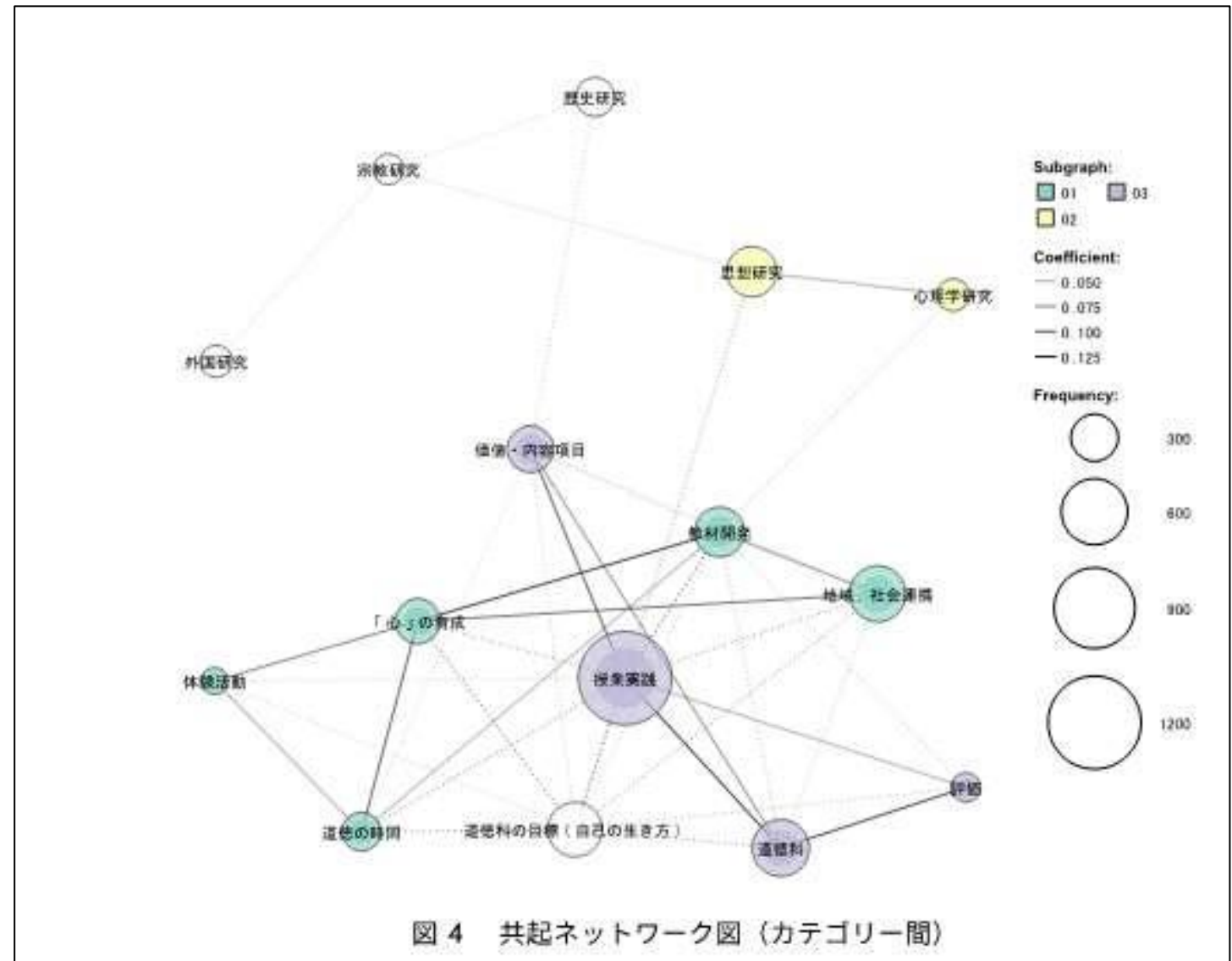
3-1-3 道徳（科）教育研究におけるメソドロロジーとは？

日本道徳教育学会

- ・ CiNii Articles(CiNii Research)
「道徳教育」2000-2021

- ◆ 文献数は道徳の教科化をめぐる動向と連動して増減
- ◆ 理論的研究との接続性は薄い
- ◆ 授業実践や教材開発に分類されるものが多い
- ◆ 実践開発や提案が多い
- ◆ 道徳科研究に特徴的なメソドロロジーを見いだすことはむずかしい

- ・ 国語科「価値目標」論との関連（皆尾・山元, 2021）



走井洋一「道徳（科）教育研究におけるメソドロロジーとは？」
教科教育学コンソーシアム第11回研究推進委員会配付資料
(2024年1月21日) より引用↑

3-2 国内外の教科教育学のメソドロジー研究の整理

- ◆ 教科教育研究を行う5つの学協会の学会誌論文を、分類枠組みに着目して検討したことで、ある学会で有効な分類項目が他教科に最適であるとは限らないことを確認できた。
- ◆ 対象や質的・量的研究の詳細を検討した地理教育の結果から、**各教科には、内容に沿った特有の研究手法があると示唆**される。
- ◆ 他教科提案の分類で、各学協会の論文の傾向を比較検討することで、数学教育では、一定数みられた[理論的・哲学的]研究は、科学、社会科、地理、家庭科教育では減少または掲載が少ないなど特徴を見出すことができた。
- ◆ **各学協会共通して授業や教材の「実践・開発」と「実証・経験」的研究**が多くを占め、特に社会科や家庭科ではそれを**複合的に行っている**ことなど教科教育研究の特徴が改めて確認できた。
- ◆ 科学と社会科の分類を整理して、数学から提案された目的と方法をクロスした枠組みは、各教科共通の傾向を捉え得る枠組みとして今後さらなる検討が必要。

- ◆ 近年の体育科・国語科では**教師教育研究や学習者研究の重要性**が指摘され、その方向での研究が増えている。
- ◆ とくに体育科では教師教育研究の現状と課題を緻密に振り返る枠組みが提案された。フィードワークや実証的研究において「論理実証主義的アプローチ」「解釈的アプローチ」を超えた、「**批判的探究**」「**批判的アプローチ**」の**重要性**が指摘されている。
- ◆ 「個人主義的」方向性や「伝統的・技巧的」方向性をもった研究へのアプローチのもつ意義について検討していくことも、**教科教育学研究固有の問題**である。
- ◆ 道徳（科）教育においては教材開発や授業実践を扱ったものや実践開発・提案は多いが理論的研究との接続性は薄い傾向にあるが、他教科において教育内容について学問的な真実性をもとに議論される余地の可能性が指摘された。
- ◆ いくつかの教科で、国語科における「文学教育内容」の教科横断的拡張や、道徳（科）教育における「価値」の扱いと国語科における「価値目標」論との関係性等、**教科内容の教科横断的展開の可能性**が示唆された。

4. 教科教育学のメソドロジーにおける課題

4-1 「実験・実証的」「実践的」な研究の増加とそれに伴う「量的研究」「質的研究」の内実の検証

- ◆箕浦(2015)の用語を使えば、教科教育学研究も、①論理実証主義的アプローチ→②解釈的アプローチ→③批判的アプローチと変化している。
- ◆実践を扱う「質的研究」は②が中心。③が見られるのは「授業研究」「学習者研究」であり、教科教育学が「原理」「歴史」「比較」から出発しながら、教科の「目標」「内容」「方法」を問題としながら、授業の事実に向き合うことでつかみ出してきたものである。それを発展させていく必要がある。
- ◆このことは江藤・嘉数(2019)の用語を使えば「批判的探究」の「方向性」をどのように追究していくのかということでもある。
- ◆江藤・嘉数(2019)の分析枠組みのなかにあった「「伝統的・技巧的」方向性（「理論の中ではなく『現場』に存在する」ことを明らかにし、「単純な記述的モデル化」パラダイムに依拠）」は、教科教育学研究における「質的研究」の基礎的方法論として以前重要なものである。

4-2 教科における教師教育研究・学習者研究の手続きの確立

◆「3-2」に「各学協会共通して授業や教材の〔実践・開発〕と「実証・経験」的研究が多くを占め、特に社会科や家庭科ではそれを複合的に行っていることなど教科教育研究の特徴が改めて確認できた」とあり、これは他の教科にも同様に指摘することができる。

◆宮本(2017)が言うように、「教育現場における「実習（実践）」を行い、「省察」を通じた気付きに基づく理論の再構築、新たな実践理論の構築」は「教職大学院」での研究と教育の主眼である。そこで重んじられている「実習」と「省察」の内実をどのように明らかにしていくのかということは、教科教育学研究方法論上の重要な課題であり続けてきた。「教職大学院」でのとくに教育実践開発の領域においても重要な課題である研究の手続きを確立することは、教科教育学の研究においてもなお重要である。

4-3 教科における教師教育研究・学習者研究の手続きの確立

・ Buckelew & Ewing(2019) *Action Research for English Language Arts Teachers: Invitation to Inquiry*, Routledge.

・ 米国における「アクション・リサーチ」のテキスト。教師-研究者の「Inquiry Stance」（探究的に学ぶ姿勢）を重視。

「Cultivating Your Inquiry Identity」「Using Inquiry Protocols and Strategies: Making a Plan」「Exploring the Landscape of Publication」という三つのセクションに分かれている。第3セクションに収められているのは最終章（第6章）の「Invitation to Publication: Inquiry as a Reciprocal and Ongoing Process（出版へのいざない：互恵的で継続的なプロセスとしての探究）」。

◆ 「アクション・リサーチ」が授業者の立場からの「解釈的アプローチ」にとどまることが、学習者の思考実践を篡奪することになりかねないことへの反省がある。むしろ、participatory（参加的）な側面を強調しているからこそ、アクション・リサーチ研究におけるpublication（発表・公刊）をreciprocal（互恵的）でongoing（継続的）なprocessとして探求していくを主張している。これは、実践研究の「語り」がどこに向かうか（学会か、教師仲間か、生徒か、自分か）ということについての提案でもある。

◆ 「語るものと語られるものをはっきりと区別する構造は、帝国主義的知の構造そのものであるという（スピヴァック 一九九八）。」（太田, 2001, p.195）

4-4 教科教育の歴史研究・比較研究の新たな方向性の探究

→教科の内容と方法に応じた歴史研究・比較研究の開発？

歴史研究「一般国語教育史は、一国の国語教育事実の史的展開を記述したものであって、これにはさまざまな視点が考えられよう。それに対して国語教育個体史は、一般国語教育史の特殊具現態と見ることができよう。一国の国語教育史は、その断面をいきいきと個々の個体史ににじませる。国語教育個体史は一般国語教育史の動態を、まざまざと写しだし、やがてそれはその限界までもきちっと反映させるであろう。」（野地,1956, p.24）

→「一般国語教育史」（事実史・個別史・問題史）と「国語教育個体史」（実践史・生活史・成長史）との連関を探究する必要性の指摘はいまだに重要。そして、「個体史」は教科教育研究の対象を得るために重要である。時代時代の教科教育文化「マンタリテ」を捉える対象を確保するものとして。

比較研究①記述・解釈研究・・・共時的 ②摂取・交渉研究・・・通時的 ③比較研究Ⅰ（個々の研究者とその協力者による） ④比較研究Ⅱ（複数の研究者・教師の共同研究）

②・・・黒川(2016) = 国語教科書教材「三年とうげ」の源流と伝播過程を朝鮮・日本・韓国源流の文献を博搜してたどる

④・・・勝田(2022) = 比較教科教育研究のためのフィールドワーク調査とその分析

4-5 「教科」 にとってのWHY・WHAT・HOWを探究する営みの 継続

→なぜ〇〇科を教えるのか、〇〇科とは何か、という問題は絶えず考え続けていかなければならない。

「今後の日本の英語教育の可能性の一つは、国語教育と連携し、『日本語と英語を行き来する』機会を確保することを通して、学習者の言語意識を磨き、母語と外国語の運用能力を同時に高めていくことにある。この方針を取れば、仮に将来、英語を忘れてしまったとしても、英語授業で学んだことは母語の能力として息づいていくことになる」（柁木, 2023, p.377）

◆「連携」する（つなぐ）からこそ、頭のなかで内的な対話がうまれ、それがハートの部分の変化をもたらす。同時に「連携」は学習者と教師の「もがき」ももたらす。「行ったり来たり」の運動のなかでそんなふうに生み出されるものが確かにある。「連携」もまた理解の種類の一つなので、その「成果」は、本書の随所に示されるように、教師や学習者が残した言葉を読み取ることによってあらわれるのだと考える。

4-6 各教科が相互に柔軟な関係性をもちながら相互に影響を及ぼし合う組織体（アセンブリ）としての教科教育学

◆そのための対話の継続の重要性。Generalというよりも dialogicな関係。Dialogical disciplineとしての教科教育学。Reciprocal and ongoingな研究の開発。

「今学びつつあることと過去に学んだこととの「レリバレンス（関連性）」「相互関係」を学習者に意識させることが効果的な指導を生み出すための大切な条件であり、「相互関係性 (interconnectedness)」をつくり出すことこそ効果的で力のある (effective)カリキュラムと指導の特徴」(Applebee, 2002, p.32)。

◆学習者と教科内容との「相互関連性」の探究は、どの教科でも重要であり、それが教科教育学のメソドロジーとして非常に重要である。それは教科間でも。カリキュラムとは対話(conversation)の賜物。そして学習者と教師と学習内容との関わりのなかで生まれるもの。

引用・参考文献

- ・ 荒谷航平, 雲財寛, 大谷洋貴, 小川博士, 川崎弘作, 下平剛司, 田中秀志, 中村大輝, 長沼祥太郎, 岡部舞, 藤原聖輝, 三浦広大, 渡辺理文. (2024). 1977-2020年の『科学教育研究』のテーマと方法に関する研究動向. 科学教育研究, 47(4), 423-438. <https://doi.org/10.14935/jssej.47.423>
- ・ 石島 恵美子 (2020) 家庭内食品ロス削減行動を促す問題解決型調理実習プログラムの開発, 日本家庭科教育学会誌, 63(1), 15-26
- ・ 江藤真生子・嘉数健悟(2019)体育科教師教育研究の動向と課題について, 体育科教育学研究, 35 (2), 1-16
- ・ 太田好信(2001)『民族誌的近代への介入』人文書院
- ・ 勝田光(2022)アメリカのリテラシー教育が国語科に与える示唆—フロリダ州の幼小中高等学校におけるフィールド調査を踏まえて—, 国語科教育, 91,
- ・ 木原成一郎 (2015) 専門職としての教師の成長過程と支援体制, 岡出美則ほか編, 新版体育科教育学の現在, 創文企画, 190-191

引用・参考文献

- ・木原成一郎(2022)小学校体育専科教師の授業力量形成に関するライフヒストリー研究—林俊雄と大後戸一樹の授業スタイルの形成と変容, 創文企画
- ・小林裕子, 永田智子, 鈴木千春(2022)中学校家庭科「災害時の食」教育授業のモジュール化と有用性の評価, 日本家庭科教育学会誌, 64(4), 266-277
- ・草原 和博, 溝口 和宏, 桑原 敏典 (2015) 社会科教育学研究法ハンドブック, 明治図書
- ・黒川麻美(2016)民話「三年峠」の教材化をめぐる史的考察—植民地朝鮮・日本・韓国の通時的検討を通して—, 国語科教育, 79
- ・全国大学国語教育学会編(2002)国語科教育学研究の成果と展望, 明治図書
- ・全国大学国語教育学会編(2013)国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ, 学芸図書
- ・全国大学国語教育学会編(2023)国語科教育学研究の成果と展望Ⅲ, 溪水社
- ・柁木貴之(2023)国語教育と英語教育をつなぐ—「連携」の歴史、方法、実践, 東京大学出版会
- ・松浦拓也(2015)「教科教育学の研究領域と方法はどのようなものか」日本教科教育学会編『今、なぜ教科教育なのか』文溪堂
- ・松村幹男(1986)「教科教育研究の領域と方法」広島大学教科教育学研究会編『教科教育学Ⅰ 原理と方法』建帛社
- ・松浪軌道 (2021)費用便益分析を批判的に組み込んだ小学校公民学習の開発—公共事業の経済的な理解をめざして—, 社会科研究, 94, 13-24
- ・皆尾賛・山元隆春(2021)輿水実「基本的教材」の検討：価値目標との関連に着目して、広島大学大学院人間社会学研究科紀要教育学研究, 2, 78-86

引用・参考文献

- ・ 箕浦康子(2015)文化人類学は国語教育学研究に何を提供できるかーフィールドワークの手法を中心にー, 国語教育研究手法の開発, 学芸図書, 23-28
- ・ 宮本浩治(2017)教職大学院における教科教育研究, 日本教科教育学会編, 教科教育学研究ハンドブック, 教育出版, 78-83
- ・ 野地潤家(1956)国語教育個体史研究, 光風出版
- ・ 藤森裕治(2022)国語科学習者研究の成果と展望, 国語科教育学研究の成果と展望Ⅲ, 溪水社, 545-552

- ・ Applebee, Arthur N.(2002) Engaging Students in the Disciplines of English: What Are Effective School Doing?, *English Journal* , July, 30-36
- ・ Buckelew, Mary & Janice Ewing(2019) Action Research for English Language Arts Teachers: Invitation to Inquiry, Routledge.
- ・ LeCompte, M.D.& Preissle, J.(1993)*Ethnography and Qualitative Design in Educational Research(2nd ed.)*, New York: Adademic
- ・ Tinning, Richard (2006) Theoretical orientations in physical education teacher education. In: Kirk, D. Macdnald, D. O’Sullivan, M. (Eds.), *Handbook of Physical Education* , Sage, 369-385.